

授業概要

東アジア社会の歴史的過程に大きな影響を与えた中国について、史学史の観点を織り交ぜた概観を行う。現在、中国の国際的存在感は大きなものになっているが、そのありようは伝統的に培われた価値観に拠っており、歴史による理解が必須のものとなっている。本講義では、中国理解の基礎として中国史の通史的講義を行うが、その中国が他の地域・文化と大きく異なり、また周囲に大きな影響を与えたものとして、「歴史編纂」の伝統がある。歴史編纂の歴史を同時に概観することで、中国そして日本にとって「歴史」がどのような意義を持ってきたのか、考える機会を作りたい。

授業計画

第1回	イントロダクション：「歴史」とは何か？
第2回	文明の始まりから周まで — 「史」の始まりから『春秋』の成立
第3回	春秋戦国から秦・前漢まで — 古代国家と『史記』の成立
第4回	後漢 — 『漢書』の成立、豪族社会と儒教
第5回	三国から魏晋南北朝 — 危機の時代と個人の記録
第6回	隋・唐 — ユーラシア国家と歴史の制度化
第7回	宋 — 読まれる史書と『資治通鑑』
第8回	補足回①：日本の「史書」編纂と歴史概念 — 日本の「歴史」とは？
第9回	遼・金・西夏/南宋から元、明（初期） — 民族の時代を「史書」はどう描くか
第10回	明後期 — あふれる銀と本、「歴史」の大衆化
第11回	補足回②：地方「志」の成立と定着 — 中国のもうひとつの「歴史」伝統
第12回	清前期 — 文化統治と禁書、「盛世」と考証学の後ろ側
第13回	清後期 — 「西洋の衝撃」と「近代」、「歴史」の政治化
第14回	民国期 — 民族主義と歴史、「歴史学」の始まり
第15回	人民共和国、そして現代へ — 「歴史」の断絶を経てもいまだ編まれる「史書」
第16回	筆記試験

到達目標

- 中国の歴史を基礎的に理解し、自分自身との文化的関係に気づく。
- 「歴史」自体のありようを知り、「歴史」が自分自身にとってどのような意味を持つかを考える。
- 物事を「歴史的に考える」視座を得る。

履修上の注意

- 特にありませんが、高校にて「世界史」・「日本史」を履修しなかった方、中国史の初心者も歓迎します。
- 科目名は「東洋史」ですが、日本の視点も含まれますので、日本史に関心のある方の受講も歓迎します。

予習・復習

- 毎回の講義にて配布するレジュメを読み返すこと。
- 講義にて提示される参考文献のうち、興味関心のあるものに目を通すこと。

評価方法

- 平常点（毎回配布のリアクションペーパー20%）、小レポート（20%、文献の要約と感想）、試験（60%）。小レポートは第八回ごろに課題を提示し、授業期間中の提出とします。なお、テストの問題を小レポートの内容とリンクさせる予定です。

テキスト

- 教科書は無し（毎回、レジュメを配布します）。
- 中国史初学者には、参考文献として山本英史『現代中国の履歴書』（慶応義塾大学出版会、2003）。
- その他、参考文献を各回の授業にて提示します。